宗祇独吟『遺誡百韻』の新注解

New Commentary of Yuikai - Hyakuin

勢田勝郭

Katsuhiro SETA

宗祇独吟『遺誡百韻』の注解としては、現在もなお『宗祇名作百韻注釈』（昭和六〇年）等が流布しているが、以後の連歌研究の進展の結果として、今日ではさすがに不十分な所の多いものとなっている。本稿は、それに対し、今日の研究レベルに則した新たな注解を提供しようとするものである。

本稿が取り扱う連歌は、明応八年、七十九歳となった宗祇が、三月二十日に発句の想を得、七月末に百韻として完成させたものである。『遺誡百韻』の称呼は、大阪天満宮文庫滋岡本等の注に「門弟達の遺誡の為なれば」云々とあることに依拠するが、連歌の最高峰の作者の最高峰の作品の一つとして名高く、後世には「此道之相伝、此独吟にきはまれる」（同、奥書）とまで評されるものである。

注解を施すにあたり、テキストは『宗祇名作百韻注釈』所載のものを基礎とし、他本と校合して、仕立・付合・去嫌の面でもっとも問題がないと思われるものを設定して用いることとした。ただし、紙幅の都合上、その設定の過程について具体的に述べることは省略せざるを得なかった。また、寄合の指摘も連歌の注解では重要であるが、これも、必要と思われる範囲にとどめた。去嫌については、末尾に一覧表の形で示すこととした。それについては、拙稿「連歌去嫌の総合的再検討」（奈良工業高等専門学校「研究紀要」第五二号）を参照していただきたい。ネット上で見ることができる。一覧表の「凡例」も、そこに譲る。以上、各点、了解されたい。

本百韻には二系統の古注が存在する。一つは宗牧注と伝えられるもの、もう一つは周桂からの聞書と伝えられるものである。前者の代表として金沢市立図書館『連歌集』所収本（以下、金沢本古注）、後者の代表として大阪天満宮文庫滋岡本（以下、天満宮本古注）が、『宗祇名作百韻注釈』に収載されている。本稿も大いにそれらを参考とさせていただいた。学恩に深く感謝するものである。

明応八年三月二十日
賦何人連歌

01　限りさへ似たる花なき桜かな　　宗祇

《解釈》桜という花は、盛りの時はもちろんだが、散り際の様も比類のないものだ。

※賦物は「何人」。「桜」に依って「桜人」と賦している。

※句意は右のとおりで単純であるが、これが人生における桜の見納めだろうと宗祇が予期した上での句であること、また、自分もこの桜のように美しく未練なく散れたらと願っていることの二つは強調しておきたい。なお、この百韻の「我が影なれや更くる灯」という自画像の挙句は、この発句と互いに照応するものである。

※単に「花」とすれば桜花のことだというのは古典文学の基礎の基礎だが、この句の場合、一句中に「桜」と言い表している。このような句は、連歌では「桜」の句と

され、「花」の句とはされない。現在の連歌研究では常識となっていることだが、今なお誤った古い知識にもとづくものがあるので、敢えて述べる所である。

限りさへ似たる花なき桜かな
しづかに暮るゝ春風の庭

02

《解釈》晩春の夕暮の庭。風はことさらに花を散らすほどではないが、それでも、限りとなった桜は静かにはらはらと散ってゆく。その様もまた、比類のないものだ。

しづかに暮るゝ春風の庭
仄霞む軒端の峰に月出でゝ

03

《解釈》春風が緩やかに吹く庭は、静かに暮れて行く。軒端にかかる遠くの山の峰は薄く霞んで見え、その背後に出た月は、次第に明るさを増してゆく。

仄霞む軒端の峰に月出でゝ
思ひもわかぬ仮ぶしの空

04

《解釈》ようやく一夜の旅宿を得ることができた。夜の道を迷いながら来たので、方角も解らない。月が出れば方角も解るのだがと、夜空を眺めていると、軒端にかかる遠くの山の峰の辺りがほのかに霞んでいるようだ。そうか、そっちが月の出の方角なのだ。

思ひもわかぬ仮ぶしの空
来し方をいづくと夢のかへるらむ

05

《解釈》道を踏み迷いつつ、今夜はここで一夜を過ごすことになった。空を仰いでも、やって来た道の方角すら見当がつかない。今夜もまた故郷に帰る夢を見ることだろうが、夢は、どちらの方角に帰るのであろうか。

来し方をいづくと夢のかへるらむ
行く人見えぬ野辺のはるけさ

06

《解釈》野宿の一夜が明け、目を覚ますと朝になっていた。夢を見ていたはずだが、その夢はどこから来て、そして帰っていったのか、覚えがない。野中の道は遥かに続く。私のほかに、誰も行く人はいない。

※「来し方」に対し「行く人」と言う所がちょっとしたミソ。類例は「覚えず過ぎぬ生まれ来し方／行末は程なかるらし老の果」（熊野千句・第四「何人」九八／九九）など。

行く人見えぬ野辺のはるけさ
霜まよふ道はかすかにあらはれて

07

《解釈》冬の野は行く人もなく一面に霜に覆われているが、それでも、以前に人が踏み分けた道の跡は、かすかにそれと知れ、それが一筋遥かに続いている。

霜まよふ道はかすかにあらはれて
枯るゝもしるき草むらのかげ

08

《解釈》一面の霜ではあるが、人が踏み分けた道の跡は、かすかにそれと知れる。草むらの陰の小草も霜枯れてはいるが、それでも、何の草かははっきりと判別できるほどだ。

枯るゝもしるき草むらの陰
鳴く虫のしたふ秋などいそぐらむ

09

《解釈》枯れはてようとする草むらの陰からは、まだ虫の声が、かれがれながらそれと識別できるように聞こえる。冬になれば死に絶える虫たちは、こんなにも鳴き惜しんでいるのに、秋よ、お前はどうしてこうも急いで立ち去ろうとするのか。

※前句の「枯る」は、この付合では、「草むら」と「虫の声」の両方に利かされていると解釈すべきであろう。勿論、「枯る」に「虫の声」が寄合。先例は「下葉は草に枯るゝ松がね／冬の来る野にはやどらぬ虫の声」（初瀬千句・第一「何路」八／九）など。

※「虫」の心を思いやり、「など」と、あたかも人に問いかけるように「秋」に問いかける所、いかにも宗祇らしい仕立の句である。天満宮本古注には「面白き句様なるべし」と見える。研究者はじっくり吟味すべきであろう。

鳴く虫のしたふ秋などいそぐらむ
そのまゝはげし野分だつ声

10

《解釈》秋こそが自分たちの季節だというように虫たちの鳴く声が聞こえていたが、突然強い風が吹いて、その音で、虫たちの声はピタリと鳴き止んだ。風は強くなるばかり。どうやら、このまま野分となるようだ。虫たちは、秋の夜長を鳴き明かすつもりでいただろうが、秋よ、お前はどうしてそんなに急いで野分を呼んできたのだ。

※「そのまゝはげし」と、時間的な状況の推移を短く的確に表現した措辞が見事である。和歌にも、連歌にも先例は見出せない。やはり宗祇。「吹く音きけば野分だつ頃」（天文十四年二月二十五日「何人」九六）などとかの凡庸な句とはレベルが違う。

※同字は五句去りであるが、「野分」には「暴風」という替字があるので、「野」字とは間隔二句以上で可。従って、第一五句の「野山」と指合にならない。

そのまゝはげし野分だつ声
目にかゝる雲もなきまで月すみて

11

《解釈》秋の夜空は目にかかる一片の雲もなく、清澄な月の光が皓々と地上を照らしていたが、突然強い風が吹き、空の気色も変わりはじめた。風は強くなるばかり。どうやら、このまま野分となるようだ。

目にかゝる雲もなきまで月すみて
清見が関戸波ぞ明けゆく

12

《解釈》秋の夜空は目にかかる一片の雲もなく、清澄な月の光が皓々と地上を照らしている。ここは清見が関。関の戸のあたりまで波が打ち寄せている。間もなく夜が明ける。関の戸も開くことだろう。

※「夜もすがら富士の高根に雲消えて清見が関にすめる月かな」（詞花・九-三〇三、左京大夫顕輔）の和歌に依り、場所を「清見が関」とした付合である。
※「月」に「清見が関」が寄合。先例は「月はつれなく残る天の戸／秋の行く清見が関はうらさびて」（葉守千句・第九「朝何」九二／九三）など。「清見が関」は駿河国の名所。現在の静岡市清水区興津清見寺町が故地。

清見が関戸波ぞ明けゆく

13　いつ来てか角田川原にまたも寝む

《解釈》角田川原での旅泊。目を覚ますと、清見が関は関の戸のあたりまで波が打ち寄せている。夜が明けると関の戸も開かれる。間もなく出発しなければならないが、生きている間にもう一度この角田川原で一夜を過ごすことがあるだろうか。
※「角田川原」は『新勅撰集』に「真土山夕越えゆきていほさきの角田川原にひとりかも寝む」（八-五〇一、弁基法師）とある所。元歌は『万葉集』にあり、現代では紀伊国（橋本市隅田町芋生付近）とされているが、中世においては駿河国の清見が関の近辺と考えられていた（李下集・七三四など、引用省略）。他に「角田川原は船もいそがず／雲さへや別れやすらふ清見潟」（池田千句・第一「何人」八八／八九）など。

いつ来てか角田川原にまたも寝む

14　離ればつらし友とする人

《解釈》角田川原での旅泊。京を出た時から一緒だった友とも、ここで別れる。生きている間に、もう一度この角田川原で二人一緒に一夜を過ごすことがあるだろうか。辛いことだが、もう可能性はあるまい。
※付句は『伊勢物語』第九段に「もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり」とある表現。それを想起するのは古典の常識で、前句の「角田川原」は、この付合では武蔵・下総国境の角田川となる。

離ればつらし友とする人

15　契りきやあらぬ野山の花のかげ

《解釈》思いがけない野山で花を見、見ず知らずの人とその場の友となり、そして別れる。何の約束をして出会ったわけではないけれど、やはり名残惜しく、つらい気持ちがする。
※前句の「友」は、先の付合では共に旅をする人のこと。それを、花見の際に出会った見知らぬ人に取りなして、句境を見事に転換している。「あらぬ野山の花のかげ」という語の連鎖も美しく情趣が深い。
※「契りきや」と反語表現を用いるのが宗祇好みの仕立。「知らぬどち花咲く野辺に出で逢ひて」などしても付合の論理は同じだが、出来は大差である。

契りきやあらぬ野山の花のかげ

16　世をのがれても春はむつまし

《解釈》世を捨てた身の上、春になろうが、花が咲こうが、心が動かされることはないはずなのに、思いがけない野山で花に出会うと、やはり睦ましい気持ちになる。何の約束もなくこの花とここで出会ったのも、何かの縁なのだろう。

世をのがれても春はむつまし

17　身を隠す庵は霞をたよりにて

《解釈》世を捨て、誰にも知られまいと隠れ住む身の上。春になって、庵の周囲は霞に深く立て籠められている。これだけ霞が深いと、近くに人が来ても、ここに私が住んでいるとは気づくまい。どうも春は、世間一般の人だけでなく、私のような世捨人にとっても有難い季節であるようだ。
※春になると、山の奥まで人が入り込んできて、世捨人には煩わしいとするのが普通の発想。その逆に、春は世捨人にとっても好都合だという所に、意表を突く面白さがある。俳諧味と言ってよいかも知れない。第二八句、第七九句も参照されたい。

身を隠す庵は霞をたよりにて

18　消えむ煙のゆくへをぞ待つ

《解釈》深い霞に立て籠められた庵に身を隠して暮らす身。願うのは、このまま誰にも知られずに（火葬の）煙となって、大空に消えて行くことだ。

消えむ煙のゆくへをぞ待つ

19　藻塩くむ袖さへ月をたのむ夜に

《解釈》名月の夜。今夜は、藻塩を焼いて生業とする者たちさえも、（自分たちが立てた）煙が消え去り、きれいな月が眺められることを願っているだろう。
※第一六句から第一八句まで、限度いっぱいに「述懐」が三句連続している所。前句の「煙」は、先の付合では火葬の煙、それを藻塩の煙に取りなして句境を転じ、述懐を逃れている。「山遠く帰る鳥辺の夕煙／海士の塩屋ぞ見るもさびしき」（顕証院会千句・第六「何田」七九／八〇）など、よく用いられるテクニックであるが、「藻塩くむ袖さへ月をたのむ夜」というレトリックは、やはり宗祇。「月の夜を藻塩汲みてやたのむらむ」などとしてしまったら、それこそ台無しである。なお「煙」に「塩」が寄合であるのは、右の顕証院会千句の例のとおり。
※第一一句で「月」が詠まれており、この面（初折裏）で二句目の「月」であるが、宗祇の連歌では何の問題もない。念のために言えば、『宗祇名作百韻注釈』はこの作品の「月」「花」の配置を例に挙げて「全般的に自由な内容展開」「破格」と論じているが（三五九ページ）、今日の研究レベルでは的外れと言わざるを得ない。

藻塩くむ袖さへ月をたのむ夜に

20　心なくてや秋を恨みむ

《解釈》藻塩を焼いて生業とする者たちさえも今夜の名月を眺めるはず。それなのに、ひたすらに秋を憂きものとして恨むとしたら、余程情趣を解さない者と言うべきだろう。

心なくてや秋を恨みむ

21　**かゝるなよあだことの葉の露の暮**

《解釈》露いっぱいの秋の夕暮。私はあの人を待っている。多分、あの人は来ない。あの人の心にも私への秋(飽き)が来ているのだ。それを恨めしく思うのは止そう。今更悔いても遅いが、不誠実な男の上べばかりの言葉に身を委ねるべきではなかったのだ。

誰をかとはむあはれとも見じ

22　**誰をかとはむあはれとも見じ**

《解釈》露いっぱいの秋の夕暮。私はあの人を待っている。今頃、あの人は誰を訪ねようとしているのだろうか。私のことを、可哀想とも思ってはいないだろう。今更悔いても遅いが、不誠実な男の上べばかりの言葉に身を委ねるべきではなかったのだ。

契りてもえやはなべての草の原

23　**契りてもえやはなべての草の原**

《解釈》契りを交わしたとしても、あなたにとって私は、所詮、何の花が咲くわけでもないただの草の原。その後に尋ねて行くのは誰ですか。まさか私ではないでしょう？　そんな私を、可哀想とも思ってくれないでしょう？

※「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ」を本歌とする付合。『源氏物語』花宴巻に見える朧月夜内侍の歌である。

かへり来むをもしらぬ古郷

24　**かへり来むをもしらぬ古郷**

《解釈》必ず帰ってくると約束して故郷を出ていった人。けれど、故郷といっても、何もない草の原と同じような所。もっといい所はいくらでもあるだろう。いつ帰ってくるのか、あまりアテにしない方がいいだろう。

いかにせし船出ぞ跡も雲の波

25　**いかにせし船出ぞ跡も雲の波**

《解釈》船が湊を出た時はどんな状態だったか。今は、振り返っても何も見えず、雲と波とが水平線で一つになっているばかりである。いつ故郷に帰ることができるか、そんなこと、もう考えても仕方がない。

涙の海を渡る旅人

26　**涙の海を渡る旅人**

《解釈》船が湊を出た時はどんな状態だったか。今は、振り返っても何も見えず、雲と波とが水平線で一つになっているばかり。旅人は涙を流しながら大海を渡って行く。

※「船」に「渡る」が寄合。先例は「浦遠き霧間に船のほの見えて／空に消えても渡る雁がね」(応永十八年八月二十一日「何人」八一／八二)など。ただし「船」に「渡る」と付けるのは所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

唐土も天の下とやつらからむ

27　**唐土も天の下とやつらからむ**

《解釈》旅のつらさに涙を流しつつ海を渡る旅人。いっそ、唐土まで旅すればどうだろうか。いや、唐土といっても天の下の人間世界。同じようにつらい事だらけだろう。

※付句は「唐土もあめの下にぞありと聞く照る日のもとを忘れざらなむ」(新古今・九-八七一、成尋法師母)を念頭においた仕立であろう。

すめばのどけき日の本もなし

28　**すめばのどけき日の本もなし**

《解釈》「日の本」と言うからには、お日さまのもとでほかほかとのんびり過ごせるはずだが、実際の生活は心の休まる暇はない。では唐土ではどうか。そこも、所詮、天の下の人間世界。同じようにつらい事だらけだろう。

※前句の「唐土も……つらからむ」を理屈づけた付合であるが、その論理展開は、有名な「ことわりや日の本ならば照りもせめさりとては又あめが下とは」という降雨祈願の小町の俳諧体伝承歌と軌を一にして、「日の本」という言葉との矛盾を無理やり突いた上でのものであり、そこに俳諧味がある。近代の研究者にはほとんど無視されているが、これも宗祇連歌の要素の一つとして重要である。

※「唐土」に「日の本」が寄合。他の例は「日の本のしづめと仰ぐ神慮／唐土船も住吉の岸」(石山四吟千句・第五「何木」五七／五八)など。

桜咲く峰の柴屋に春暮れて

29　**桜咲く峰の柴屋に春暮れて**

《解釈》訪れる人もない峰近くの茅屋。春も終わりに近づき、普通なら、お日さまのもとでほかほかとのんびり過ごせるはずだが、咲いている桜がいつ散ってしまうかと思うと、どうも気持ちが落ち着かない。

※天満宮本古注に「散るとあるべきを、咲くと奇特也」と見える。付句がもし「桜散る峰の柴屋に春暮れて」であれば、当然のことをいうだけの凡庸な付合となってしまう。宗祇連歌のレベルの高さを思い知るべきであろう。

※第二四句で居所(古郷)が詠まれており、指合を生じている。後の紹巴流の連歌なら強く批判される所であるが、宗祇の連歌は、その点で鷹揚な所がある。

薄く霞める山ぎはの里

30　**薄く霞める山ぎはの里**

《解釈》訪れる人もない峰近くの茅屋。桜はまだ咲き残っているが、いよいよ春も終わりに近づいた。見下ろせば、山の裾野の里は薄く霞に覆われている。

※峰は裾野に比べ気温が低いので、桜は遅くまで咲いているのである。

薄く霞める山ぎはの里

31　月落ちて鳥の声〳〵明くる夜に

《解釈》月は山の端に落ちかかり、夜が明けようとしている。鳥たちも目覚めたのであろう、鳴き声が聞こえる。山際の里が、薄霞の中にほのかに見えるようになった。

※視覚と聴覚を融合して、山の辺の里の夜明けを時間の経過も含めて情趣豊かに表現している所、私には見事としか言いようがない。同様な句境でも、「霞がくれの春の遠山／有明の月も別れの雁鳴きて」（応永二十六年二月六日「山何」九〇／九一）など、決して悪い付合ではないが、レベルの差ははっきり感じられる。

月落ちて鳥の声〳〵明くる夜に

露名残なく起きや別れむ

32　露名残なく起きや別れむ

《解釈》月は山の端に落ちかかり、夜が明けようとしている。鳥たちも目覚めたのであろう、鳴き声が聞こえる。床から起きあがると、あたりは、露がいっぱいに置かれている。あの人はそそくさと帰り支度をする。何の名残惜しさもないようだ。あの人の心は、もう私から離れようとしているのだろうか。

※前句の「鳥」を、鶏に取りなして、句境を恋に転じた付合である。

露名残なく起きや別れむ

身にしめる風のみ袖のかたみにて

33　身にしめる風のみ袖のかたみにて

《解釈》後朝の別れ。あの人には何の名残惜しさもないようだ。それを私は見送る。身にしむ風の通りすぎる袖から、あの人の移り香が微かに漂う。それだけがかたみなのだ。

※「別れ」に「かたみ」が寄合。先例は「面影も別れの後はうきものを／残す鏡やかたみなるらむ」（応永三十二年三月二十五日「山何」一三／一四）など多い。

身にしめる風のみ袖のかたみにて

たへ来しかたの夕べにぞなる

34　たへ来しかたの夕べにぞなる

《解釈》後朝の別れ、帰ってゆくあの人を見送る。風が冷たい。風に吹かれた袖から、あの人の移り香が微かに漂う。それだけが昨夜のかたみなのだ。別れる時、あの人は次はいつと言ってはくれなかった。また今日から私は、以前と同じように、夕べごとに、来てくれるかどうかもしれないあの人を、辛さに耐えて待たねばならないのだ。

※「風のみ袖のかたみ」という表現から、相手の男が、次はいつとは言わずに去ったという状況を読み取るのがポイント。それが宗祇連歌のレベル。絶品ではあるまいか。

たへ来しかたの夕べにぞなる

思ふなよ忘れむもこそ心なれ

35　思ふなよ忘れむもこそ心なれ

《解釈》日が暮れはじめた。私は今日も、来る当てもないあの人を待ちわびる辛さに耐えねばならない。私はいつまでこんな状態に耐えることができるだろうか。あの人のことを忘れてしまうのも私の心。いっそあの人のことを忘れてしまえば、こんなに苦しまなくてすむのだろうが、そんなこと、私にはできそうにない。

思ふなよ忘れむもこそ心なれ

つらきにのみや慣らはさるべき

36　つらきにのみや慣らはさるべき

《解釈》あの人のことを思って苦しむのが私の心なら、あの人のことを忘れてしまうのも私の心。私の心よ、もうあの人のことは忘れてしまってくれ。私はいつまでも、こんな辛い状態をいつものことだと思いたくはないのだ。

つらきにのみや慣らはさるべき

道あるもかたへは残る蓬生に

37　道あるもかたへは残る蓬生に

《解釈》佞人に斥けられて、蓬生に零落する身の上。こんな情けない状態にいつまでも慣らわされていていいものだろうか。正しい道は、世にまだ残されているはずだ。

※恋のつらさを、世に入れられぬつらさに取りなして、鮮やかに句境を転じている。

道あるもかたへは残る蓬生に

しる人をしる花のあはれさ

38　しる人をしる花のあはれさ

《解釈》道はあるが、傍らが蓬の生え放題になっているような所に、花（桜）が咲いている。人の往来は稀で知る人は殆どいないが、知っている人は知っている。花もそれが解っているから、その人のために毎年、けなげに花を咲かせてくれるのであろう。

※付句の仕立は「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」（古今・一‐三八、とものり）を本歌とする。

しる人をしる花のあはれさ

折にあふ霞の袖も色〳〵に

39　折にあふ霞の袖も色〳〵に

《解釈》花がちょうど満開のこの折に、高貴な方がお出ましになる。供奉の人々の華やかな色とりどりの袖が、霞に浮かび、花も、自分を見に来る人だ誰かを知っているかのごとく、精一杯美しく咲こうとしているようだ。

折にあふ霞の袖も色〳〵に

帰らむ空もわかぬ春の野

40　帰らむ空もわかぬ春の野

《解釈》春爛漫の今日のこの野、野遊びに来た人々の色々の袖が、霞に浮かんで見える。興はいつまでも尽きず、空のどちらが帰るべき方向かも解らないほどだ。

帰らむ空もわかぬ春の野

鐘ぞ鳴る今日もむなしく過ぎやせむ

41　鐘ぞ鳴る今日もむなしく過ぎやせむ

《解釈》亡き人を火葬した春の野。悲しみは尽きることなく、空のどちらが帰るべき方向かも解らないほどだ。入相の鐘が鳴る。あの人が亡くなって何日になるのだろう。今日もこうして、あの人のいない一日が過ぎてゆくのか。

※金沢本古注に「前の春の野を、鳥辺野に思ひなしたる句也」とあるのに従って解釈した。「かたみの草もしげき春の野／雪とのみ消えにし人のあとの露」（応仁元年

十二月五日「何路」六四／六五）などの先例がある。

鐘ぞ鳴る今日もむなしく過ぎやせむ

42　聞けども法に遠き我が身よ

《解釈》入相の鐘が鳴る。寺の鐘は、各人の内にある仏性を呼びさまし導くためのものだと言われているが、自分はそれを聞いても日々を空しく過ごすばかりである。こんな愚かな自分でも、救われることがあるのだろうか。

聞けども法に遠き我が身よ

43　齢のみ仏に近くはやなりて

《解釈》釈尊がこの世を去られたのは、八十歳の時。自分も、もうそれに近い年齢となった。今まで、何度も釈尊の御教えを聞く機会はあったが、心はそれから程遠く、煩悩は尽きない。こんな愚かな自分でも、救われることがあるのだろうか。

※「遠き」に「近く」と付けている。類例は「鐘聞くからにしらむ遠山／降り晴れて雪より近し越の山」（応永三十年十一月二十一日「何人」八六／八七）など数多い。

※釈尊の入滅は八十歳。当時、宗祇は七十九歳。それを用いた付合である。

齢のみ仏に近くはやなりて

44　胸ならぬ月や満てるをも見む

《解釈》名月の夜が近い。毎年毎年、今年はどんなに美しくまん丸な月を見ることができるだろうかと心が揉まれる。しかし、本来なら、私が見ることを願う月は、空を照らす月ではなく、煩悩の闇を照らす「胸の月」であるべきだろう。私はもう七十九歳。釈尊がこの世を去られた年齢に近づいてしまっているのだから。

胸ならぬ月や満てるをも見む

45　霧はるゝ山になぐさめもの思ひ

《解釈》霧が晴れて山が見えるようになりました。間もなくまん丸な月も姿をあらわすことでしょう。それを眺めて、しばし心を慰めましょう。私の胸の霧だって、いつか晴れて、美しい月を見ることがあるだろうと思って…。

霧はるゝ山になぐさめもの思ひ

46　松をば秋の風もとはずや

《解釈》霧が晴れて山が見えるようになりました。それを眺めて、しばし心を慰めましょう。松に秋風が訪れて吹いています。そのように、待っている私の所を、やがてきっとあの人も訪れてくれるだろうと思って…。

※「松」に「待つ」を利かせる。「立ち別れいなばの山の峰に生ふる松とし聞かば今かへり来む」（古今・八－三六五、在原行平朝臣）の例が有名。

松をば秋の風もとはずや

47　人は誰が心の杉を尋ぬらむ

《解釈》いくら待っても、あの人は来ない。多分、誰か気の利いた好きずきしい女性の所を訪れているのでしょう。私はあの人を待つことしかできません。そんな面白くない女の所には、すぐに秋（飽き）の風が吹くのでしょうか。

※「杉」に「好き」を利かせている。「心の杉」に対して、女性が自らを「松」に喩えているのがポイント。前者が好き心のある気の利いた女性であるなら、自分は「松」のように変わりばえしない、ただ「待つ」ことしかできない女だということである。

※「松」に「杉」と付けるのはよく用いられる手法。先例は「ことのは契る住吉の松／杉たてる門にむすぶや石清水」（表佐千句・追加「山何」一八／一九）など。

人は誰が心の杉を尋ぬらむ

48　門ふる道のたえぬさへ憂し

《解釈》世間との関係を断ち切ろうとここに隠れ住むことにしたのだが、思いに反して、訪ねて来る人が絶えない。どこかに「とぶらひ来ませ」という「しるしの杉」でも立っていて、人はそれを訪ねてやって来るのであろうか。いや、どこでもない、時に寂しくてたまらなくなる私の心の中に、きっと立っているのだろう。

※有名な「我が庵は三輪の山本こひしくばとぶらひ来ませ杉立てる門」（古今・一八－九八二、よみ人しらず）の和歌を前提にした付合である。これに依拠して「心の杉」は、この付合では「とぶらひ来ませ」という気持ちの顕れになる。

※勿論「杉」に「門」が寄合となる。他の例は「杉立てる田中の里は涼しきに／友まつ暮の門のやすらひ」（享徳二年千句・第四「何人」二一／二二）など。

門ふる道のたえぬさへ憂し

49　爪木こるかげも野寺はかすかにて

《解釈》人里離れた野の寺の門前、あるかなきかに道が続いている。その道を通って、住僧がいかにも衰えはてた姿（影）で爪木を求めて出て行くのが見受けられる。出家した以上は、もう人の数には入らない身の上だが、それでも、命があるうちは、炊事のため爪木を求めねばならない。何ともつらいことだろう。

※前句の「道のたえぬ」の理由は、この付合では、住僧が爪木を求めに出なければならないからとなる。発想に意外性があり、面白い。

※「門」に「寺」が寄合。先例は「たゝけども答えぬ門の山風／寒き氷に閼伽をくむ寺」（享徳二年千句・第二「何船」九五／九六）など。

爪木こるかげも野寺はかすかにて

50　苔に幾重の霜の衣手

《解釈》ひっそりとした冬の野寺。苔の袖にも霜が幾重にも置かれるかと思われるほどの寒さの中、住僧が爪木を求めて出てゆく。その姿も、いかにも寒れて見える。

苔に幾重の霜の衣手

51　おきゐつゝ身をうちわぶる冬の夜に

《解釈》独居生活の冬の夜、寒くて眠ることができない。着ている苔の袖にも霜が幾重にも置かれるかと思われるほどだ。こんな我が身の上が情けなくてならない。

※「起く」に「置く」を利かせて、それが「霜」と寄合。先例は「消えぬるか霜うす

ぐもる朝まだき／おき出でゝ行く道のはるけさ」（河越千句・第七「薄何」九三／九四）など。また「衣」に「打つ」も寄合。先例は「衣手にあまれる露をいかゞせむ／打ちはらふべき思ひならばや」（初瀬千句・第五「何木」三七／三八）など。ただし、「霜」に「置く」、「衣」に「打つ」、共に所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

おきゐつゝ身をうちわぶる冬の夜に

52　**月寒くなる有明の空**

《解釈》身の惨めさがつらく眠られないまま、冬の夜を過ごす。夜明け前、気温はさらに下がり、有明の月の光も、さらに冴えざえとなるごとくである。

※天満宮本古注に「かどもなき句也。奇特なりとぞ」と見える。「かどもなき」は、特別なことは何もしていないということ。それでいて「奇特なり」というのは、それこそ名人の技である。研究者は虚心に味読すべきであろう。

月寒くなる有明の空

53　**芦たづも憂きふししるく音にたてゝ**

《解釈》夜明け前、気温はさらに下がり、有明の月の光もさらに冴えざえとなるごとくである。鶴の鳴く声が聞こえる。鶴もこの寒さに耐えかねているのであろう。

※「芦たづ」は植物として取り扱わないのが古来の作法。従って、第五八句の「小萩」と指合にはならない。また、水辺としても取り扱われない。

芦たづも憂きふししるく音にたてゝ

54　**心〳〵にさわぐ波風**

《解釈》波も風も、それぞれに声をあげて、荒く騒ぎ立っている。それに、鶴の鳴く声がまじっている。鶴も、そのつらさに耐えかねて、声をあげて鳴いているのであろう。

心〳〵にさわぐ波風

55　**山川も君による代をいつか見む**

《解釈》乱世の人々の心の中は常に波風が立ち騒いでおり、安らかになることがない。推古天皇の御代、吉野行幸に際して、人麻呂は「山川もよりて仕ふる」と詠じた。我々は、そのような治世にいつ出会うことができるのだろうか。

※付句の仕立は「山川もよりて仕ふる神ながらたぎつかうちに船出するかも」（万葉・一‐三九）を本歌とする。

山川も君による代をいつか見む

56　**あやふき国や民もくるしき**

《解釈》世は乱れ、天皇の威令も中々末端まで行き渡らない。そんな危殆に瀕した国では、民草もきっと苦しんでいることだろう。推古天皇の御代、人麻呂は「山川もよりて仕ふる」と詠じた。我々は、そのような治世にいつ出会うことができるのだろうか。

※「国」は律令制度における「国」。近代的な「国家」ではない。念のため。

あやふき国や民もくるしき

57　**植ゑしよりたのみを露に秋かけて**

《解釈》田植えがすんでから秋になるまで、雨露の恩に恵まれ稲が順調に生育することを願う。しかし、この国では天候不順の日が続いている。もし凶作となれば、民草は苦しみにまみれることだろう。

※「たのみ」に「田の実」を利かせている。「のち蒔きの遅れて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞ聞く」（古今・一〇‐四六七、大江千里）など、和歌以来の手法。連歌では、他に「村雨や露を残してそゝぐらむ／秋のたのみの摩きもぞ添ふ」（天正二年四月十日「何木」九九／一〇〇）など。

植ゑしよりたのみを露に秋かけて

58　**仮庵の小萩かつちるも惜し**

《解釈》秋が来てここで田を守る頃になったら眺めようと、前もって植えておいた小萩。露の恵みをうけて、稲は順調に実りの時期を迎えているが、萩は次々に散りはじめている。それはそれで惜しまれてならない。

※前句の「植ゑし」は、この付合では萩のこととなる。所謂「体付」である。

※「田」に「仮庵」が寄合。「秋の田の仮庵のいほの苫をあらみわが衣手は露にぬれつゝ」（後撰・六‐三〇二、天智天皇御製）が有名。先例は「田の面の月の秋近き影／いねがての仮庵の床の夜ごとに」（文安五年二月五日「山何」四二／四三）など。

※「かつちるも惜し」と直截に主観的な形容詞を用いるのが宗祇の好み。「仮庵の小萩ちりすぐる頃」とか「仮庵の小萩うつろひにけり」とかなら、普通。

※「秋の田の仮庵の宿の匂ふまで咲ける秋萩見れどあかぬかも」（後撰・六‐二九五、よみ人しらず）を念頭においた付合であろう。元来の歌は『万葉集』巻十にあり。

仮庵の小萩かつちるも惜し

59　**衣うつタべすぐすな雁の声**

《解釈》小萩が次々に散って行く仮庵の夕べ。砧の音が聞こえる。いや、砧の音だけではない。雁の声も紛れているようだ。雁よ、この夕べの中に、みんな渡って来い。明日には、萩はすべて散ってしまっているかも知れない。そうなると、もうお前たちに、この萩の花を見せることができない。それは、あまりに惜しいことではないか。

※砧の音に紛れて雁の声を聞くという状況を読み取るのがポイント。「夜やふくる雲のはるかに鳴く雁も一つになりぬ衣うつ声」（壬二集・五五二）が解りやすい。

※あたかも人に対するがごとく、雁にもこの仮庵の萩の花を見せてやりたいと思って、雁に「夕べすぐすな」と呼びかける所、これぞ宗祇と言うべき付合である。

衣うつタべすぐすな雁の声

60　**むなしき月を恨みてや寝む**

《解釈》旅に出たあの人からは、もうずっと何のたよりもありません。私はあの人を偲び、砧を打つ。雁よ、お前には、きっとあの人からの手紙が託されていると思います。この夕べの中にも渡ってきて下さい。そうでなければ、今夜もまた私は、何のよすがもないまま、恨めしい思いで月を眺めて寝なければなりません。

※ポイントは、雁は遠く離れた人からの手紙を託されて渡ってくるとされているということ。和歌では「秋風に初雁がねぞ聞こゆなる誰が玉章をかけて来つらむ」（古今・四‐二〇七、とものり）が有名。

むなしき月を恨みてや寝む
とはぬ夜の心やりつる雨はれて

61

《解釈》雨が止んで、月が出た。あの人が来ないのは雨のせいだと、自分で自分を思い慰めていたが、月夜になっても、やはりあの人は来ない。月は、結局、私の期待が空しいものだということを思い知らせただけだったのだと、月を恨めしく思いながら、今夜は、もう寝ることにしましょう。

※「月夜には来ぬ人待たるかきくもり雨も降らなむわびつゝも寝む」（古今・一五‐七七五、よみ人しらず）を念頭においた付合である。

とはぬ夜の心やりつる雨はれて
身をしるにさへ人ぞなほ憂き

62

《解釈》あの人が来ないのは雨のせいだと、自分で自分を思い慰めていたが、雨が晴れても、やはりあの人は来ない。結局、あの人にとって、私はその程度の存在でしかないのだと思い知らされるのだけれど、それでも、やはり、あの人のことを恨めしく思わずにはいられません。

※前句の「雨」に対して「身を知る」と付けている。「かず〳〵に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」（古今・一四‐七〇五、在原業平朝臣）を本歌とした付合。先例は「よそはいさ軒なる雲の降る雨に／身を知る人の住むは隠家」（応永二十六年三月二十九日「山何」二五／二六）など。

身をしるにさへ人ぞなほ憂き
忘れねといひしをいかに聞きつらむ

63

《解釈》「私のことはもう忘れて下さい」と、確かに私は言いました。それは、あなたの本当の気持ちを確かめたかったから。でも、それ以来、あなたは本当に私のことを忘れてしまったようです。あなたにとって、私は、所詮その程度の女だったということでしょう。悪いのは、心にもないことを言った私です。それは解っていますが、それでもやはり、あなたが恨めしく思われるのです。

※「忘れねといひしにかなふ君なれど問はぬはつらき物にぞありける」（後撰・一三‐九二八、本院のくら）を念頭においた付合である。短い詩形の中で、恋に苦しむ女性の複雑微妙でせつない心理と行動を見事に表現し得ている。

忘れねといひしをいかに聞きつらむ
風のたよりもかくや絶ゆべき

64

《解釈》「私のことはもう忘れて下さい」と、確かに私は言いました。それは、あなたの本当の気持ちを確かめたかったから。でも、それ以来、あなたは本当に私のことを忘れてしまったようです。このようにして、いずれは、風のたよりにもあなたのことを聞くことはなくなるのでしょう。

風のたよりもかくや絶ゆべき
花ははや散るさへまれの暮ごとに

65

《解釈》暮ごとに春風がやってきて、花を散らして行く。人はそれを見て、風の来訪を知る。もう散る花も稀になってきた。このまま花が散り尽くしてしまえば、花の散るのをみて風の来訪を知ることはなくなってしまうだろう。

花ははや散るさへまれの暮ごとに
日ながきのみや古里の春

66

《解釈》古里の春。散る花も暮ごとに稀になってゆく。このまま、花が散り尽くしてしまえば、他に慰みとなるものは何もない。ただ長い春の日を徒然と暮らすばかりである。

日ながきのみや古里の春
糸ゆふのありなしをたゞ我が世にて

67

《解釈》人の来訪もない古里で、ただ長い春の日を徒然と暮らすばかり。生きていると言えば生きていると言えるし、死んだと言えば死んだも同然の、世間とは何の係わりもない身の上である。

※付句の「世」は「身の上。境遇」の意味に解した（岩波古語辞典）。例は「いやしく貧しき者も、高き世に改まり、宝にあづかり」（源氏物語・若菜下）など。

※「糸ゆふ」に「糸」を利かして、それが前句の「ながき」と寄合になっている。先例は「薬玉をながき菖蒲に掛けそへて／織るや錦の糸のいろ〳〵」（応永三十二年十二月十一日「何路」二九／三〇）など。

糸ゆふのありなしをたゞ我が世にて
霞にかゝる海士の釣船

68

《解釈》海上にかかった霞の中に、海士たちの釣船が見える。彼らは、遠くから見ればあるかないか分からないような細い糸を頼りに、波に揺られながら生涯を送るのだ。

※「糸」に「釣」が寄合。他の例は「柳の糸ぞ枝にまとへる／岸陰の波うらゝなる釣たれて」（大山祇神社法楽長禄三年千句・第二「何人」二四／二五）など。

霞にかゝる海士の釣船
ながめせむ月な待たれそ波のうへ

69

《解釈》海上にかかった夕霞の中に、波に浮かぶ海士たちの釣船が見える。あの海士

たちだって、今夜の月の美しさには心が惹かれることだろう。月よ、早く姿を見せてくれ。あんまり人を待たせてはいけない。

※「ながめよと思はでしもや帰るらん月待つ波の海士の釣船」（新古今・一六一五五九、具親）を本歌とする。熊野行幸に供奉した際、切目での作。自讃歌である。

※「月な待たれそ」と呼びかける所が宗祇一流の仕立。「眺めむと月待ちかぬる波の上」などとすると、凡庸極まりなくなる。

70　ながめせむ月な待たれそ波のうへ

《解釈》明石潟での旅泊。波の上に出る月を眺めようと待っているが、月は中々出てきてくれない。月よ、あんまり人を待たせないでくれ。お前を見ずに長い秋の夜を明かすなんてこと、出来るはずがないではないか。

※「明石潟」に「明かし難し」が利かされた秀句仕立である。先例は「須磨よりも夜はなほ月に明石潟」（応永二十六年二月六日「山何」二七）など。

71　たゞにや秋の夜を明石潟

《解釈》明石潟での旅泊。遠くにいる妻への恨みに耐えかねたような鹿の声が聞こえる。あの鹿は今夜をどのように過ごすのだろうか。私も寂しくて、この長い秋の夜を明かすことなど出来そうにない気がする。

※「明石」に「鹿」が寄合。「明石の波や寄せかへるらむ／鹿の音は夜の枕に遠ざかり」（元亀二年千句・第五「何袋」二八／二九）など。証歌は「夜をこめて明石の瀬戸をこぎ出づれば遥かにおくる棹鹿の声」（千載・五‐三一四、俊恵法師）など。

72　遠づまを恨みにたへず鹿鳴きて

《解釈》遠くにいる妻への恨みに耐えかねたような鹿の声が聞こえる。あの鹿は、妻への思いを山のように積もらせて、焦がれ死にするのであろうか。

73　思ひの山に身をやつくさむ

《解釈》所詮、人の世の中は、どこもかしこも俗塵にまみれたもの。それを殊更に払おうとしても無理。無理なことをしようとすれば、その思いが山とつもり、結局、我が身を消耗させることになるだけだろう。

※「山」に「塵」が寄合。古今集仮名序の「高き山も麓の塵ひぢよりなりて」という一節が有名。先例は「明くれば山にかゝる白雲／雪やなほ麓の塵と残るらむ」（寛正三年二月二十五日「何路」八八／八九）など。

74　払ふなよいづくか塵のうちならぬ

75　砌ばかりをいにしへの跡

《解釈》昔、誰かの居宅があったとおぼしい所。辺りはそれらしい跡も見えないが、さすがに砌の内の建物は残っている。ただ、その内部はどこもかしこも塵が積もり、今更払っても無駄だろう。ここは、このまま朽ちるに任せるより外あるまい。

※「塵のうち」を字義どおり「ほこりだらけの室内」とした付合である。発想に意外性があり、俳諧味が感じられる。

76　うゑ置きしほかは草木も野辺にして

《解釈》沢の水がさらさらと流れる初夏の野。もう田植えもすんで、風が涼しげに早苗を靡かせている。それ以外の所の草木も、次第に茂りが深くなる気配だ。

※「植ゑ置きし」は、この付合では「早苗」のこととなる。所謂「体付」である。

※「植う」に「苗」が寄合。先例は「植ゑてぞ竹のかげに住みける／水青き小田の早苗の伏見山」（宝徳四年千句・第九「何衣」六八／六九）など。

77　風は早苗をわくる沢水

《解釈》夏の宵、あの人のことが思われてならない。早苗を分けて訪れる風が涼しい。沢の蛍も飛び交いはじめた。蛍が声に出さずに忍んでいても思いに身を焦がしていることは、その光で誰にでも分かる。それははかないだけ。私もそれと同じだ。

※「沢」に「蛍」が寄合。「もの思へば沢の蛍も我が身よりあくがれにける玉かとぞ見る」（後拾遺・二〇‐一一六二、和泉式部）の歌が有名。先例は「山賤の野沢の仮庵夏かけて／飛ぶや蛍の初秋の空」（宝徳四年千句・第三「何船」五／六）など。

※「声をほに出でじもはかな」という品位あるレトリックの美しさ、「はかな」という情趣ある語の選択、「恋」への句境の転換の鮮やかさ、宗祇にとっては「並の上」程度なのかも知れないが、私のレベルではさすがとしか言いようがない。

78　色に心は見えぬものかは

《解釈》蛍が光を放って飛び交っている。声に出さずに忍んでいても、蛍が思いに身を焦がしていることは、その光で誰にでも分かる。私もそれと同じ。あの人を思う私の心は、いくら忍んでも、きっと何らかの様子となって外に現れていることだろう。はかないだけのことだ。

※「忍ぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで」（拾遺・一一‐六二二、平兼盛）の有名な和歌を念頭においた付句であろう。「出づ」に「色」が

寄合。先例は「寝ざりし床を出づる旅人／明けそむる色にや雨の晴れぬらむ」（宝徳四年千句・第八「山何」六／七）など。

※特に言うべきこともないような地味な句だが、「見えぬものかは」と反語表現を用いる所が宗祇好み。「色に心は見えもこそすれ」と言うより、表現は微妙で奥行きが出る。

色に心は見えぬものかは

79　誰が袖となせば霞にひかるらむ

《解釈》霞の袖が、あたりの景色を覆っている。心は、それに惹かれて浮かれ立つ。私の心がこんなに惹かれるのは、多分、余程魅力的な女性の袖だからであろうが、それは一体誰なのだろうか。こんな私の好き心は、きっと、周囲の人に気取られてしまっていることだろう。

※「霞の袖」という伝統的措辞を念頭にして、それを、魅力的な女性の袖とカン違いしたかのごとく取り扱って遊んだ俳諧的付合である。これも宗祇連歌の一体。

※「誰」ととぼけているが、それが春の女神の佐保姫であることは、当時の連歌愛好者なら誰にでも知れること。「佐保姫の霞の袖も誰ゆゑにおぼろにやどる春の月影」（続古今・一-八〇、従二位家隆）など。

誰が袖となせば霞にひかるらむ

80　春さへかなしひとり越す山

《解釈》霞の袖が、あたりの景色を覆っている。私はそれに引き込まれるように、春の山を越えて行く。春なので心が浮き立つはずだが、一人の旅は、やはりどこか寂しく悲しい。こんなに霞に惹かれるのは、ひょっとして、私の心が、霞の袖を、誰か道連れとなってくれそうな人の袖とカン違いしているからではあるまいか。

春さへかなしひとり越す山

81　おのが世は雁の別れ路数たらで

《解釈》山を一人で越えてゆく。春だというのに心はもの悲しい。以前この山を越えた時には連れだつ人がいたが、その人も今はこの世にはいない。この世が仮初のものだとは承知しているが、人生とは畢竟、離別なのだ。雁が北へ帰ってゆく。雁は、帰る時には、来た時よりも必ず数を減らしているという。あの雁の中にも、きっと一緒に来た仲間が死んで寂しく帰るものがいることだろう。

※逐語的な解釈は殆ど不可能な付合であるが、「北へ行く雁ぞ鳴くなるつれて来し数は足らでぞ帰るべらなる」（古今・九-四一二、よみ人しらず。左注：ある人、男女もろともに人の国へまかりけり。男まかりいたりて、すなはち身まかりにければ、女ひとり京へ帰りける道に、帰る雁の鳴きけるを聞きてよめる）と「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」（新古今・一〇-九八七、西行法師）の和歌を想起すれば、論理構成は理解できよう。言葉を補って右のごとくとした、如何。

※雁は日本では繁殖しない。従って、「雁風呂」「雁供養」の話が伝えられているごとく、帰る時には渡来時よりも必ず数を減らしている。

※「雁」に「仮」が掛けられている。先例は「連れてこし契りも雁の別路に」（延徳二年九月「夢想」一三）など。

※私のレベルでは、前句との関係性、一句の仕立、共に素晴らしいとしか言いようがない。いかにも宗祇らしい宗祇ならではの付合だと思う。

おのが世は雁の別れ路数たらで

82　秋をかけむもいさや玉の緒

《解釈》雁が北へ帰ってゆく。雁は、帰る時には、来た時よりも必ず数を減らしているという。私の人生もそれと同じ。この世が仮初のものだとは承知しているが、親しい人は次々に亡くなってゆく。雁は、秋にまた渡ってくるだろうが、私はそれまで命を長らえることができるであろうか。

秋をかけむもいさや玉の緒

83　身の憂さは年も経ばかり長き夜に

《解釈》歳老いての独居の侘びずまい。秋の夜はとりわけつらく、一夜だけでも一年を経るように長く感じられる。この秋中、私は命を長らえることができるであろうか。

※「緒」に「長し」が寄合。先例は「玉の緒にかけてもよわれ我が思ひ／心長さぞ人になほ憂き」（文明四年十月十六日「何路」九五／九六）など。ただし、「緒」に「長し」は所謂「用付」なので、後の連歌では好まれない。

※前句の「秋をかけむ」は、先の付合では、「今（春）から秋になるまでの間に」の意。この付合では「今年の秋のはじめから終わりまでの間に」の意となる。

身の憂さは年も経ばかり長き夜に

84　見えじ我にと月やゆくらむ

《解釈》身を侘びて眠れぬまま過ごす秋の夜。一夜だけでも一年を経るように長く感じられる。語り合えるのはただ物言わぬ空の月ばかり。だが、その月ももう山の端に隠れようとしている。まるで私とはもう語り合いたくないとでも言うようではないか。

見えじ我にと月やゆくらむ

85　よしさらば空も時雨れよ袖の上

《解釈》此の世の辛さに、私の袖には、常に涙の時雨が降っている。涙で曇った目には、自分の姿が美しくは見えないだろうと思ってか、月も私から姿を隠すようだ。それなら、いっそのこと空も本当に時雨れてしまってくれ。そうすれば、私は、空も私に同情して泣いてくれているのだと、少しは慰められた気持ちになれるだろう。

※これぞ宗祇の世界とも言うべき悉皆有情の付合である。前句との論理的関係性、一

句の仕立の見事さ、いずれも最高レベルと言える。研究者は、天満宮本古注の「此の句、名誉の句也」との評を虚心に受け入れ、深く味読すべきであろう。

よしさらば空も時雨れよ袖の上

86　**たぐひだにある思ひならばや**

《解釈》此の世の辛さに、私の袖には、常に涙の時雨が降って止むことがない。それなら、空も時雨れてくれ。そうすれば、私は、泣いているのは自分だけではないのだと、少しは慰められた気持ちになれるだろう。

たぐひだにある思ひならばや

87　**誰来てか嵐にたへむ山の陰**

《解釈》山陰の独居生活。嵐の日は、とりわけ辛さが身にしみる。誰かと一緒であれば、何とか耐えることができるのかも知れないが、そんな人がいるわけがない。

誰来てか嵐にたへむ山の陰

88　**奥は雲ゐる岩のかけ道**

《解釈》雲に隠された山の奥の奥まで、桟の道が岩伝いに続いている。道がある以上、その奥の山陰に住む人がいるようだが、その人は、嵐の時など、どのように耐えて暮らしているのであろうか。

奥は雲ゐる岩のかけ道

89　**落ちそめしたぎつ瀬いづく吉野川**

《解釈》激湍となって流れてゆく吉野川。その最奥の川上はどこなのであろうか、雲に隠されて見えない。ただ、桟の道が岩伝いに続くばかりである。

※「かけ道」に「吉野」が寄合。先例は「庵ならぶる岩のかけ道／契りてや吉野の奥をたのむらむ」（明応六年正月一日「何路」八二／八三）など。「世に経れば憂さこそまされみ吉野の岩のかけ道踏みならしても」（古今・一八-九五一、よみ人しらず）が有名。

落ちそめしたぎつ瀬いづく吉野川

90　**はやくのことを涙にぞとふ**

《解釈》私の目からは、常に涙が吉野川のたぎつ瀬のように流れ落ちる。涙よ、お前がこのようにいつも流れるようになったのはいつからのことなのだろうか、教えてくれ。

※「受けてには」などと呼ばれた手法である。前句末の「吉野川」を受け、有名な「吉野川岩波たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし」（古今・一一-四七一、つらゆき）の和歌に依拠して、付句の初めに「はやく」と置いている。先例は「風をのみ花は恨みじ吉野川／はやくもかはる故郷の春」（延徳二年九月「夢想」一三／一四）など。勿論、「吉野川」に「早く」が寄合。

はやくのことを涙にぞとふ

91　**ものごとに老は心の跡もなし**

《解釈》歳をとると何事も忘却のかなた。昔のことを思い出そうとしても思い出せない。涙よ、お前は昔からずっと私と一緒だった。だから、昔の私のことを知っているはずだ。もし昔を思い出したくなったら、これからは、お前に尋ねることにしよう。

ものごとに老は心の跡もなし

92　**めで来し宿は浅茅生の月**

《解釈》世にもてはやされながら月を愛でた時期もあったが、零落して、住まいも今は浅茅が生え放題になっている。歳をとると何事も忘却のかなた。しかし、月だけは、昔に変わることなく、清澄な光を放っている。

めで来し宿は浅茅生の月

93　**野辺の露も袖より置きやならふらむ**

《解釈》世にもてはやされながら月を愛でた時期もあったが、零落して、住まいも今は浅茅が生え放題になっている。秋となって、これから野辺も露しげくなるが、それより先にまず露が置きならされるのは、私の袖の上だろう。

野辺の露も袖より置きやならふらむ

94　**山こそゆくへ色かはる仲**

《解釈》秋が来て、山の色が変わる。あの人の心にも秋（飽き）が来はじめたのか、今までとは違う様子が感じ取られる。これから野辺も露しげくなるが、それより先にまず露が置かれるのは、きっと私の袖の上だろう。

※「野辺」に対して「山」と付けているのが、ちょっとしたミソ。他の例は「松虫の声する方の野辺に来て／暮れて小倉の山の急雨」（応永二十六年九月二十五日「片何」二三／二四）など、古くからある手法である。

※「山」に「色」が結ばれると、植物のイメージが喚起されるので、植物とは二句嫌われねばならない。従って、第九二句の「浅茅」と指合を生じている。第二九句参照。

山こそゆくへ色かはる仲

95　**つれもなき人にこの世をたのまめや**

《解釈》秋になれば、山の色が変わる。そのように、あの人の心にも秋（飽き）が来たのだろう、以前とは違って、全くつれなくなってしまった。あの人をアテにして生きてゆくことはもうできまい。けれど私には、他にどのような生き方があるでしょうか。

つれもなき人にこの世をたのまめや

96　**死ぬる薬は恋にえまほし**

《解釈》全くつれなくなってしまったあの人をアテにして生きてゆくことは、もうできません。けれど、私には、他にどのような生き方があるでしょうか。いっそ死んでしまいたい。何かよい薬はありませんか。

死ぬる薬は恋にえまほし

97　蓮葉のうへを契りのかぎりにて

《解釈》今はの際に、あの人は「後の世では、一つ蓮の上に」と約束してくれました。いくら恋しく思っても、この世ではもう逢うことはできません。私も死んで、約束どおり一つ蓮の上で、あの人にお逢いしたいのです。何かよい薬がないでしょうか。

蓮葉のうへを契りのかぎりにて

98　ちるや玉ゆら夕立の雨

《解釈》夏の池、蓮の葉の上に夕立の雨が降りかかる。雨は露の玉となって玉ゆらの間（しばらく）は蓮の葉の上に留まるが、夕立が過ぎれば、また暑い夏の日差しによって蒸発してしまう。雨露にとっては、その間だけが蓮葉との契り（縁）だったわけだ。

※極楽浄土の蓮葉をそれを夏の池の蓮葉に取りなして句境を転じている。

※「蓮」に「玉」が寄合。先例は「台のはちす花ひらけぬる／夏草のうちにも露の玉散りて」（紫野千句・第四「何物」、八二／八三）など。「蓮葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」（古今・三‐一六五、僧正へんぜう）の和歌が有名。また「夕立」も「蓮」と寄合。先例は「玉ちる波も清き蓮葉／夕立のあとより月の影すゞし」（応永三十二年二月二十九日「何目」三八／三九）など。証歌は「夕立の降りくる池の蓮葉にくだけてもろき露の白玉」（新後拾遺・三‐二五九、光厳院御製）など。

ちるや玉ゆら夕立の雨

99　雲風も見はてぬ夢と覚むる夜に

《解釈》夏の夜、激しい雨と風の音に目が覚める。夕立が通過しつつあるのだと思う間もなく、風も雨も止んでしまった。夕立を降らせた雲も、もう見えない。夕立の降り残りの露が、（再び姿を現した月の光を受けて）キラキラと輝いているばかりである。あの雲や風は何だったのか。見果てぬ夢の中の出来事だったような気がする。

※第九二句で「月」が詠まれており、まだ間隔六句なので、「月」の語を用いることができないが、それでいて「月」が暗示される表現が巧妙である。やはり宗祇の技。

※「夕立」に「雲」が寄合。先例は「夕立は過ぎゆく音もはやき瀬に／船遠ざかる雲の山の端」（寛正三年二月二十五日「何路」三三／三四）など。

雲風も見はてぬ夢と覚むる夜に

00　我が影なれや更くる灯

《解釈》強い風の音に目を覚ましたと思うのだが、外は風もなく、空には、風を吹かせたような雲も見えない。夢の中の出来事だったのだろうか。夜もかなり更けているらしい。消え残りの灯が仄めいている。この世における今の私の姿は、恐らく、あの消え残りの灯のようなものだろう。

※挙句は多少なりとも慶賀の気分を持たせるのが作法。その作法を全く無視して、老残の自画像を詠じて百韻を終える。異例中の異例であるが、「限りさへ似たる花なき桜かな」というこの百韻の発句と照応して、最晩年の宗祇の内面を窺わせる。

宗祇独吟「遺誡百韻」去嫌一覧（Ⅰ）

			季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	釈	人	名	衣	時	夜	風	聞
初表	01	かきりさへ にたるはななき**さくら**かな	春					木																
	02	しつかにくるる はるかせのには	春									居									夕		風	
	03	ほのかすむ のきはのみねに **つき**いてて	春	月						山		居		聳	光							夜		
	04	おもひもわかぬ かりふしのそら				旅																夜		
	05	こしかたを いつくとゆめの かへるらむ		夢		旅																夜		
	06	ゆくひとみえぬ のへのはるけさ																人						
	07	しもまよふ みちはかすかに あらはれて	冬										降											
	08	かるるもしるき くさむらのかけ	冬					草																
初裏	09	なくむしの したふあきなと いそくらむ	秋						虫															
	10	そのままはけし のわきたつこゑ	秋																				風	聞
	11	めにかかる くももなきまて **つき**すみて	秋	月										聳	光							夜		
	12	きよみかせきと なみそあけゆく				旅					水	□							名		△	夜		
	13	いつきてか すみたかはらに またもねむ				旅					水								名			夜		
	14	はなれはつらし ともとするひと																人						
	15	ちきりきや あらぬのやまの **はな**のかけ	春					木		山														
	16	よをのかれても はるはむつまし	春				述																	
	17	みをかくす いほはかすみを たよりにて	春				述					居		聳				人						
	18	きえむけふりの ゆくへをそまつ					述							聳										
	19	もしほくむ そてさへ**つき**を たのむよに	秋	月				×			水				光					衣		夜		
	20	こころなくてや あきをうらみむ	秋																					
	21	かかるなよ あたことのはの つゆのくれ	秋		恋								降								夕			
	22	たれをかとはむ あはれともみし			恋													人						
二表	23	ちきりても えやはなへての くさのはら			恋			草																
	24	かへりこむをも しらぬふるさと				旅						居												
	25	いかにせし ふなてそあとも くものなみ		船		旅					水			聳										
	26	なみたのうみを わたるたひひと		涙		旅					水							人						
	27	もろこしも あめのしたとや つらからむ																	□					
	28	すめはのとけき ひのもともなし	春												□				□					
	29	**さくら**さく みねのしはやに はるくれて	春					木		山		居												
	30	うすくかすめる やまきはのさと	春							山		居		聳										
	31	**つき**おちて とりのこゑこゑ あくるよに	秋	月					鳥						光						△	夜		聞
	32	つゆなこりなく おきやわかれむ	秋		恋								降									夜		
	33	みにしめる かせのみそての かたみにて	秋		恋													人		衣			風	
	34	たへこしかたの ゆふへにそなる			恋																夕			
	35	おもふなよ わすれむもこそ こころなれ			恋																			
	36	つらきにのみや ならはさるへき			恋																			
二裏	37	みちあるも かたへはのこる よもきふに						草				□												
	38	しるひとをしる **はな**のあはれさ	春					木										人						
	39	をりにあふ かすみのそても いろいろに	春											聳						□				
	40	かへらむそらも わかぬはるのの	春																					
	41	かねそなる けふもむなしく すきやせむ																			▽			
	42	きけとものりに とほきわかみよ															釈	人						
	43	よはひのみ ほとけにちかく はやなりて															釈							
	44	むねならぬ**つき**や みてるをもみむ	秋	月											光							夜		
	45	きりはるる やまになくさめ ものおもひ	秋		恋					山			□	聳										
	46	まつをはあきの かせもとはすや	秋	松	恋			木															風	
	47	ひとはたか こころのすきを たつぬらむ			恋			□										人						
	48	かとふるみちの たえぬさへうし										居												
	49	つまきこる かけものてらは かすかにて						×									釈							
	50	こけにいくへの しものころもて	冬	衣				×					降							衣				

宗祇独吟「遺誡百韻」去嫌一覧（Ⅱ）

			季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	釈	人	名	衣	時	夜	風	聞
二表	51	おきゐつつ みをうちわふる ふゆのよに	冬															人				夜		
	52	**つき**さむくなる ありあけのそら	冬	月											光							夜		
	53	あしたつも うきふししるく ねにたてて						×	鳥		×													聞
	54	こころこころに さわくなみかせ									水												風	
	55	やまかはも きみによるよを いつかみむ								山	水							×						
	56	あやふきくにや たみもくるしき																人						
	57	うゑしより たのみをつゆに あきかけて	秋					□					降											
	58	かりほのこはき かつちるもをし	秋					草				□												
	59	ころもうつ ゆふへすくすな かりのこゑ	秋	衣					鳥											衣	夕			聞
	60	むなしき**つき**を うらみてやねむ	秋	月	恋										光							夜		
	61	とはぬよの こころやりつる あめはれて			恋								降									夜		
	62	みをしるにさへ ひとそなほうき			恋													人						
	63	わすれねと いひしをいかに ききつらむ			恋																			
	64	かせのたよりも かくやたゆへき			恋																		風	
二裏	65	**はな**ははや ちるさへまれの くれことに	春					木													夕			
	66	ひなかきのみや ふるさとのはる	春									居			□									
	67	いとゆふの ありなしをたた わかよにて	春						×									人						
	68	かすみにかかる あまのつりふね	春	船							水			聳				人						
	69	なかめせむ **つき**なまたれそ なみのうへ	秋	月							水				光							夜		
	70	たたにやあきの よをあかしかた	秋								水								名			夜		
	71	とほつまを うらみにたへす しかなきて	秋						獣									×						
	72	おもひのやまに みをやつくさむ								×								人						
	73	はらふなよ いつくかちりの うちならぬ																						
	74	みきりはかりを いにしへのあと					述					□												
	75	うゑおきし ほかはくさきも のへにして						◎																
	76	かせはさなへを わくるさはみつ	夏					草			水												風	
	77	こゑをほに いてしもはかな とふほたる	夏		恋				虫															聞
	78	いろにこころは みえぬものかは			恋																			
名表	79	たかそてと なせはかすみに ひかるらむ	春		恋									聳				人		衣				
	80	はるさへかなし ひとりこすやま	春			旅				山								人						
	81	おのかよは かりのわかれち かすたらて	春						鳥															
	82	あきをかけむも いさやたまのを	秋				述																	
	83	みのうさは としもふはかり なかきよに	秋				述											人				夜		
	84	みえしわれにと **つき**やゆくらむ	秋	月											光			人				夜		
	85	よしさらは そらもしくれよ そてのうへ	冬										降							衣				
	86	たくひたにある おもひならはや																						
	87	たれきてか あらしにたへむ やまのかけ								山								人					風	
	88	おくはくもゐる いはのかけみち								山				聳										
	89	おちそめし たきつせいつく よしのかは								×	水								名					
	90	はやくのことを なみたにそとふ		涙			述																	
	91	ものことに おいはこころの あともなし					述																	
	92	めてこしやとは あさちふの**つき**	秋	月				草				居			光							夜		
名裏	93	のへのつゆも そてよりおきや ならふらむ	秋										降							衣				
	94	やまこそゆくへ いろかはるなか	秋		恋			□		山														
	95	つれもなき ひとにこのよを たのまめや			恋													人						
	96	しぬるくすりは こひにえまほし			恋																			
	97	はちすはの うへをちきりの かきりにて			恋			×									釈							
	98	ちるやたまゆら ゆふたちのあめ	夏										降								×			
	99	くもかせも みはてぬゆめと さむるよに		夢										聳								夜	風	
	00	わかかけなれや ふくるともしひ																人				夜		